大衆は事態を理論的(空論的)にではなく……

労働者・兵士代表ソヴェト全ロシア会議に参加したボリシュヴィキの集会での演説*

1917年4月4(17)日

いくつかのテーゼを前もってしめしておいたので、それに若干の注釈を補足しよう。時間がたりなかったので、詳しい、系統だった報告を提出することができなかったのである。

基本的な問題は、戦争にたいする態度である。ロシアについて書いたものを読んだり、ここで現に見たりするばあい、正面に押しだされてくる基本的なものは、祖国防衛派の勝利であり、社会主義の裏切り者の勝利であり、ブルジョアジーの大衆欺瞞である。わがロシアの社会主義運動内の状態は他の国々と同じであることが目につく。すなわち、祖国防衛主義であり、「祖国擁護」である。ちがっているのは、わが国に見られるような自由はどこにもないということ、そこでわれわれには、国際プロレタリアートにたいする責任が負わされているということである。新政府は、共和制の約束にもかかわらず、これまでと同じように帝国主義的であり――徹頭徹尾帝国主義的である。

「一、リヴォフ一派の新政府のもとでも、政府が資本家的な性格をもっているため、戦争は、ロシアについてはいまなお無条件に帝国主義的強盗戦争であって、この戦争にたいするわれわれの態度の問題で、『革命的祖国防衛主義』にいささかでも譲歩することはゆるされない。」

「革命的祖国防衛主義をほんとうに正当なものとする革命的戦争に、自覚したプロレタリアートが同意できるのは、つぎの条件がみたされるばあいにかぎられる。(イ)権力が、プロレタリアートとこれに同調する貧農層との手にうつること、(ロ)口さきだけでなく、実際に、いっさいの領土併合を放棄すること、(ハ)実際に、資本のすべての利益と完全に手をきること。」

「革命的祖国防衛主義の一般の信奉者の広範な層は、疑いもなく誠実であって、征服の目的からではなく、やむをえないものとして戦争を認めているにすぎないのだから、つまり、彼らはブルジョアジーにだまされているのだから、彼らにたいしては、とくにくわしく、根気よく、忍耐づよく、その誤りを説明し、資本と帝国主義戦争との切ってもきれない結びつきを説明し、資本を倒さなければ、強制的でなく、真に民主主義的な講和で戦争をおわらせることは**不可能**であることを、証明しなければならない。」

「戦線の軍隊のあいだでこの見解のもっとも広範な宣伝を組織すること。」

「交歓」。

――依然として帝国主義的である新政府のもとでも(の…青山)、戦争にたいするわれわれの態度では、祖国防衛主義にたいする譲歩はいささかもゆるされない。大衆は事態を理論的にではなく、実践的に、見ている。彼らは「私は祖国を擁護したいとおもっているのであって、他国を侵略しようとおもっているのではない」と言っている。どんなばあいに、戦争を自分たちのものとみなすことができるだろうか？　併合を完全に放棄するばあいである。

大衆は理論的にではなく、実践的に問題を扱おうとしている。われわれの誤りは、理論的な扱い方である。革命的祖国防衛主義を実際に正当化するような革命的戦争にたいして

は、自覚したプロレタリアは、同意をあたえることができる。兵士大衆にむかっては、問題を実践的に提起すべきであり、それ以外であってはならない。われわれは――けっして平和主義者ではない。だが基本的な問題は、どの階級が戦争をしているか、ということである。銀行と結びついた資本家階級には、帝国主義戦争以外のどんな戦争もすることはできない。労働者階級には――できる。ステクロフやチヘイゼは、なにもかも忘れてしまった。労働者代表ソヴェトの決議を読んでみるなら、社会主義者と自称する人々が、いったいどうしてこのような決議**を通過させたのかと、びっくりするであろう。

ロシアにおける特異なもの。それは、野蛮な暴力から、巧妙な欺瞞への驚くほど急速な移行である。基本的条件は、**口さきだけでなく**、実際に**領土併合を放棄すること**である。クールランドをロシアに併合するのは領土併合であるという『ソツィアル-デモクラート』の言明にたいして『レーチ』はわめきたてている。しかし領土併合とは、民族的特質をことにするあらゆる国土の併合であり、その希望に反して民族を――この民族が自分を別な民族と感じているかぎり、そのちがいが言語であろうとなんであろうと同じことである――併合することは、すべてそうである。それは(そう思はないのは…青山)、長いあいだにはぐくまれてきた、大ロシア人の偏見である。

国際資本と完全に手をきるばあいにだけ、戦争をおわらせることができる。戦争をやってきたのは、個々の個人ではなく、国際金融資本である。国際資本と手をきることは、容易ならぬ仕事であるが、しかし、戦争をおわらせることも、容易ならぬ仕事である。戦争を一方的にやめようと考えることは、子供じみており、幼稚である……ツィンメルヴァルド、キンタール***……国際社会主義の名誉を守りとおす義務は、だれよりもわれわれにかかっている。取り扱いの困難さは……(ますます国際社会主義の団結を増す…青山)

征服のためにではなく、**やむをえないものとして**、戦争を認めているに**すぎない**広範な大衆のなかには、疑いもなく、祖国防衛主義的な気分があるのであるから、資本を倒さないかぎり、強制的でない講和で戦争をおわらせることはできないということを、彼らにむかってとくに詳しく、根気よく、忍耐づよく、説明してやらなければならない。この考えを広く、きわめて広い範囲に、展開しなければならない。兵士たちは、どうやって戦争をおわらせるか、具体的な回答を要求している。しかし人々にむかって、われわれは個々人の善意だけで戦争をおわらせることができると約束することは――政治的詐欺行為である。大衆に警告しなければならない。革命は、困難な事業である。誤りなしにというわけにはいかない。誤りは、われわれが革命的祖国防衛主義を、その根底からあますところなく（暴露しなかった？）点にある。革命的祖国防衛主義は、社会主義を裏切るものである。……にかぎるだけでは不十分である。誤りを認めなければならない。なにをすべきか？――説明することだ。社会主義とはなんであるかを知らない人々に……どのようにあたえるべきか……われわれは詐欺師ではない。われわれはただ、大衆の自覚だけに立脚しなければならない。たとえ少数派にとどまるようになろうと、かまわない。一時、指導的地位を断念するだけのことだ。少数派になることをおそれるにはあたらない。大衆が、征服を欲しないと言明するなら、私は彼らを信じよう。グチコフとリヴォフが、征服を欲しないと語るなら、彼らは詐欺師である。労働者が、国土の防衛を欲すると語るなら、抑圧された人間の本能が彼に語らせているのだ。

「二、ロシアにおける現在の時機の特異性は、プロレタリアートの自覚と組織性とが不

十分なために、権力をブルジョアジーにわたした革命の最初の段階から、プロレタリアートと貧農層の手中に権力をわたさなければならない革命の**第二の**段階**への過渡**ということにある。

この過渡は、第一に最大限の合法性があること（ロシアは、いまは世界のすべての交戦国のうちでもっとも自由な国である）、第二に、大衆にたいする暴力が存在していないこと、最後に、平和と社会主義との最悪の敵である資本家の政府にたいして、大衆が軽信的、無自覚的な態度をとっていることを、特徴としている。

このような特異性がわれわれに要求するのは、ようやく政治生活にめざめたばかりの、かつてないほど広範なプロレタリアートの大衆のあいだでの党活動の**特殊な**諸条件に、われわれが適応する能力をもつことである」。

なぜ権力をとらなかったか？　ステクロフは、しかじかの理由で、しかじかの理由で、と言っている。それはたわごとだ。問題は、プロレタリアートが十分に自覚しておらず、十分に組織されていないという点にある。これを認めなければならない。物質的な力はプロレタリアートの手中にあったが、しかしブルジョアジーのほうが自覚していたし、訓練されていた、ということになる。それは――驚くべき事実であるが、しかしそれを公然と、率直に認め、権力をとらなかったのは、組織されておらず、自覚していなかったからであると、人民にむかって言明しなければならない……幾百万人が零落し、幾百万人が死んだ……もっともすすんだ国々がほろびようとしている。だから、これらの国々のまえには、こうして……の問題がたてられている。

最初の段階から第二の段階への移行――プロレタリアートと農民への権力の移行――は、一方では最大限の合法性（ロシアはいま、世界でもっとも自由な、もっともすすんだ国である）、他方では、政府にたいする大衆の軽信的、無自覚的な態度を特徴としている。わがボリシェヴィキでさえ、政府への軽信的な態度を暴露している。これは、革命の熱中としか説明のしようがない。それは、社会主義の破滅である。同志諸君、諸君は政府にたいして軽信的な態度をとっている。もしそうなら、われわれはいっしょに行くことはできない。私はむしろ少数派にとどまっていよう。ひとりのリープクネヒトのほうが、ステクロフやチヘイゼ型の 110 人の祖国防衛主義者よりも尊い。もし諸君がリープクネヒトに共鳴しながら、たとえすこしでも仲直りする（祖国防衛主義者と）ならば、それは、国際社会主義を裏切るものであろう。もしわれわれが……そういう人々と関係を断つならば、あらゆる被抑圧者がわれわれのほうへやってくるであろう。なぜなら、戦争が彼らをわれわれのほうに連れてくるからであり、彼らにはほかに活路はないからである。

人民には、ラテン語をつかわずに、やさしく、わかりやすい言葉をつかわなければならない。人民には……権利がある……――適応し……移行……しなければならない、しかし……する必要がある。われわれの方針が正しいことがわかるであろう。

「三、臨時政府をいっさい支持しないこと。政府のいっさいの約束、とくに領土併合を放棄するというその約束は、まったくうそであることを説明すること。**この**政府、資本家の政府にむかって、帝国主義的であることを**やめよ**という、幻想を植えつけるような、ゆるしえない『要求』を出すのではなくて、この政府を暴露すること」。

――『プラウダ』は、**政府**にむかって、領土併合を放棄するように要求している。資本家の政府にむかって、領土併合を放棄するように要求するとは、ばかげたことであり……

にたいするはなはだしい愚弄である。

科学的な見地から言えば、それは、全国際プロレタリアート、全……ほどの、途方もない欺瞞である。いまや誤りを認めるべきときである。あいさつや決議はもうたくさんだ、実行にうつるべきときである。実務的な、冷静な……へ移行しなければならない。

「四、ブルジョアジーの影響のもとに陥っていて、プロレタリアートにブルジョアジーの影響を伝達している、人民社会主義者や社会革命派から組織委員会（チヘイゼ、ツェレテリその他）やステクロフ等々にいたる、**いっさいの**小ブルジョア的な日和見主義的分子のブロックにくらべて、わが党が大多数の労働者代表ソヴェト内で少数派であるという事実を、しかも、いまのところわずかな少数派であるという事実を、認めること。」

「労働者代表ソヴェトは、**ただ一つ可能な**革命政府の形態であり、したがって、**この**政府がブルジョアジーの影響のもとに陥っているあいだは、われわれの任務は、忍耐づよく、系統的に、根気よく、とくに大衆の実践的要求に適応したやり方で、彼らの戦術の誤りを**説明**することのほかにはありえないということを、大衆に説明すること。」

「自分が少数派であるあいだは、われわれは、誤りを批判し解明する活動をおこなうと同時に、大衆が経験にもとづいて自分の誤りから抜けだすことのできるように、全国家権力を労働者代表ソヴェトにうつす必要を宣伝すること」。

われわれボリシェヴィキは、最大限の革命性をひきだすことになれてきた。しかし、それだけではたりない。分析しなければならない。

真の政府は、労働者代表ソヴェトである。それ以外の考え方は無政府主義に陥ることを意味する。労働者代表ソヴェトのなかで、わが党が少数派であることは、ひろく認められた事実である。労働者代表ソヴェトがただ一つ可能な政府であり、コンミューン以外には、まだ世界で見たこともない政府であるということを、大衆に説明しなければならない。労働者代表ソヴェトの多数派が、祖国防衛主義的見地に立っているとすれば、どうなのか？

どうにもしようがない。われわれにのこされている仕事は、ただ、彼らの戦術の誤りを、忍耐づよく、根気よく、系統的に説明することだけである。

われわれが少数派であるあいだは、われわれは、大衆を欺瞞から抜けださせるために、批判の仕事をつづけよう。われわれは、大衆がわれわれの約束を信じることをのぞまない。われわれは詐欺師ではない。われわれは、大衆が**経験にもとづいて**自分の誤りから抜けだすことをのぞんでいる。

労働者代表ソヴェトの檄文、そこには、階級意識に満ちみちた言葉は、ひと言もみられない。そこには、まったくの空文句があるだけだ！　あらゆる革命をほろぼした唯一のもの――それは、空文句であり、革命的人民にたいするへつらいである。革命的空文句に巻きこまれてしまわないこと、とくに、それがとりわけ流行している時機にそうならないことを、マルクス主義全体は教えている。

「五、議会制共和国ではなくて――労働者代表ソヴェトからそういうものへあともどりするのは、一歩後退であろう――、全国にわたる、上から下までの労働者・雇農・農民代表ソヴェトの共和国。

警察、軍隊、官僚の廃止[1]。

（1）すなわち、常備軍にかえて全人民を武装させること。

官吏はすべて選挙され、いつでも代えることのできるものにし、その俸給は熟練労働者

の平均賃金をこえないようにする」。

――これは、パリ・コンミューンのあたえた教訓であるが、カウツキーはそれをわすれ、1905 年と 1917 年に労働者はこれを学んだ。これらの時期の経験は、警察の復活をゆるすべきでないこと、旧軍隊の復活をゆるすべきでないことを、われわれに教えている。

綱領をあらためるべきである。それは古くさくなった。労働者・兵士代表ソヴェトは、社会主義への一歩である。どのような警察も、どのような軍隊も、どのような官僚もいらない。憲法制定議書(会…青山)の招集――だが、だれによって？　決議は、それを長く放置するために、あるいは停滞させるために、書かれている。憲法制定議会があすにもひらかれたらうれしいことであるが、しかし、グチコフが憲法制定議会を招集するであろうと信じることは、幼稚である。臨時政府に憲法制定議会を招集させるといういっさいのおしやべりは、つまらないおしやべりであり、まったく欺瞞である。革命がおこったが、警察はのこった。革命がおこったが、全官僚、その他はのこった。ここに、革命の破滅の原因がある。労働者代表ソヴェトは、この議会を招集することのできる、ただ一つの政府である。われわれはみな、労働者代表ソヴェトに飛びついたが、しかしそれを理解しなかった。われわれはこの形態から、ブルジョアジーに追随するインタナショナルのほうへ逆もどりしようとしている。

ブルジョア共和制は、問題（戦争の）を解決することはできない。というのは、この問題は国際的規模でしか、解決できないからである。われわれは……解放を約束してはいないが、しかしわれわれは、この形態（労働者・兵士代表ソヴェト）でだけそれが可能である、と言明する。労働者・雇農代表ソヴェト以外のどのような政府も可能ではない。コンミューンについて語っても理解されないであろう。しかし、警察のかわりに――労働者・雇農代表ソヴェトが――統治することを学びたまえと言うことは――われわれのだれにもさしつかえないであろう――（それは理解されるであろう）。

統治の技能は、どんな書物からも読みとれるものではない。やってみ、失敗して、統治することを学びたまえ。

「六、農業綱領では、重心を雇農代表ソヴェトにうつすこと。」

「すべての地主所有地の没収。」

「国内の**すべての**土地を国有化し、土地の処理を地区の雇農・農民代表ソヴェトにゆだねること。貧農代表ソヴェトをべつにつくること。すべての大農場に（地方的な条件・その他に応じ、地元の機関の決定にもとづいて、おおよそ 100 デシャチーナから 300 デシャチーナの規模のものとして)、雇農代表の統制のもとに、公共の費用で模範農場をつくること。」

――農民とはなにか？　われわれは知らないし、統計もないが、しかし、その力は知っている。

もし彼らが土地を手にいれたならば、彼らがそれを諸君に提供しないであろうということ、われわれに助言をもとめないであろうということは確信してまちがいはない。綱領の軸は移動した。重心は、雇農代表ソヴェトである。もしロシアの農民が革命を解決しないならば、ドイツの労働者がそれを解決するであろう。

タンボフの百姓……

一デシャチーナにたいしては支払う必要はない。第二のデシャチーナにたいしては 1 ル

ーブリ、第三のそれにたいしては、2ルーブリ。われわれは土地を手にいれるであろうし、地主はもはやそれを取りあげることはできないであろう。

共同の原則にもとづく経営。

貧農代表ソヴェトをべつにつくらなければならない。富裕な百姓もいるし、雇農もいる。たとえ彼らに土地をあたえたところで――やはり、経営を生みだすことはできないであろう。共同原則にもとづいて経営される模範経営を、大農場からつくりだすことが必要である。そして経営は、雇農代表ソヴェトがしなければならない。

大農場はある。

「七、国内のすべての銀行をただちに単一の全国的銀行に統合し、それにたいする労働者代表ソヴェトの統制を実施すること」。

――銀行とは、「社会的簿記の形態」（マルクス）である。――戦争は経済を教えたし、銀行が人民の資力を濫費していることは、だれでも知っている。銀行は、国民経済の命脈であり、焦点である。われわれは、銀行を自分の手ににぎることはできないが、しかし、それを労働者代表ソヴェトの統制のもとに統合することを説いている。

「八、われわれの**直接の**任務は、社会主義を『導入』することではなくて、社会的生産と生産物の分配にたいする労働者代表ソヴェトの**統制**にいますぐうつることにすぎない」。

――生活と革命は、憲法制定議会を背後へ引き下げた。法律は、それが紙に書かれているということが重要なのではなく、だれがそれを施行するかということが、重要なのである。プロレタリアートの独裁は、存在しているが、しかし、それをどう扱うべきかが知られていない。資本主義は、国家資本主義へ移行した……マルクスは……実際に成熟したものだけを……

「九、党の任務。

（イ）党大会をただちに召集すること。

（ロ）党綱領の改訂。そのおもな点は、

（一）帝国主義および帝国主義戦争について、

（二）国家にたいする態度について、および「コンミューン国家[1]」というわれわれの要求。

(1) すなわちパリ・コンミューンを原型とする国家。

（三）古くさくなった最小限綱領の修正。

（ハ）党名の変更[1]。

(1) **全**世界で社会主義を裏切り、ブルジョアジーのがわに寝がえってしまった連中を公認の指導者とする「社会民主党」（「祖国防衛派」と動揺的な「カウツキー派」）という名称のかわりに、われわれは**共産党**と名のるべきである。

一〇、インタナショナルの革新。

革命的インタナショナル、すなわち、社会排外主義者と「中央派[1]」とに反対するインタナショナルを創設するためにイニシアティヴをとること。」

(1) 国際社会民主主義派内で「中央派」とよばれているのは、排外主義者（＝「祖国防衛派」）と国際主義者のあいだを動揺している潮流のことである。すなわち、ドイツにおけるカウツキー一派、フランスにおける、ロンゲー

派、ロシアにおけるチヘイゼ一派、イタリアにおけるトゥラティ一派、イギリスにおけるマクドナルド一派、など。

一般的総括。

労働者代表ソヴェトが創設され、それが巨大な勢力をもっている。だれもが、本能的に、それに共鳴している。あらゆる**革命的空文句**のなかよりも、この制度のなかには、はるかに多くの革命思想が結びついている。もし労働者代表ソヴェトが統治をその手ににぎることができるならば――自由の大業は保障される。たとえ諸君がどんなに理想的な法律を書いたところで――だれがそれを施行するであろうか？　やっぱり同じ官僚である。だが彼らは、ブルジョアジーと結びついているのだ。

大衆にむかって言わなければならない――「社会主義を実現せよ」ではなく、実施せよ（？）と。資本主義はさきへすすんでしまった。戦時の資本主義は、戦争前のそれではない。

戦術的結論にもとづいて――実践的行動へうつらなければならない。ただちに党大会を招集しなければならないし、綱領を再検討しなければならない。綱領のなかの多くのことは古くさくなってしまった。最小限綱領を変更しなければならない。

私自身としては、党名を変更し、**共産党**と名のることを提案する。「共産」という名称を、人民は理解するであろう。公認の社会民主主義者の大多数は裏切り、社会主義を売りわたしてしまった……リープクネヒトは……ただひとりの社会民主主義者。諸君は、古い思い出にそむくことをおそれている。しかし、下着を取りかえるためには、よごれたシャツを脱ぎ、きれいなものを着なければならない。なぜ、世界的闘争の経験を振りすてるのか？　全世界にわたって社会民主主義者の大多数が、社会主義を売りわたし、自国政府のがわに移ってしまった（シャイデマン、プレハーノフ、ゲード）。シャイデマンに……同意させるには、どうすべきか……この見地は、社会主義を破滅させるものである。戦争をやめることについてシャイデマンに無電を送ることは……――欺瞞である。

「社会民主主義派」という言葉は、あいまいである。徹頭徹尾くされはてた古い言葉に執着すべきでない。新しい党を建設することにつとめよ……そうすればすべての被抑圧者が諸君のほうへやってくるであろう。

ツィンメルヴァルドとキンタールでは、中央派が優勢をしめた……『ラボーチャヤ・ガゼータ』。われわれは、あらゆる経験が……しめしたことを諸君に証明しよう。われわれは、左翼を結成したこと、そして中央派と手をきったことを言明する。インタナショナルについて語るのなら――そのときは……実施したまえ、でなければ諸君は……

ツィンメルヴァルド左派の潮流は、世界のあらゆる国に存在している。社会主義が全世界にわたって二つに割れたことを大衆は理解するに相違ない。祖国防衛派は社会主義からはなれてしまった。ひとりリープクネヒトだけが……すべて未来は彼のものであろう。

ロシアでは統一の傾向が、祖国防衛派との統一が、おこなわれつつあると聞いている。それは、社会主義を裏切るものである。私は、むしろリープクネヒトのように、110 対 1 で孤立しているほうがいいとおもう。

＊　ボリシェヴィキの集会　　**事項訳注P808**

労働者・兵士代表ソヴェト全ロシア協議会がひらかれていた 1917 年 4 月 4(17) 日に、党中央委員会ビューローが召集した党活動家の全ロシア集会のこと。レーニンが演説

することになった会議は、タヴリーダ宮殿のホールでひらかれた。この演説は同日、タヴリーダ宮殿の会議室でひらかれた、ソヴェト協議会の代議中のメンシェヴィキとボリシェヴィキの合同会議の席上でくりかえされた。それは、四月テーゼ『現在の革命におけるプロレタリアートの任務について』を説明したものである。レーニンは演説全体を通じてこのテーゼを部分的に引用した。**テキストは速記録によるものではなく、書記の控えによるものである。控えには、点線で記入された脱落個所があり、またあまり明確でない個所もいくつかある。**

＊＊労働者代表ソヴェトの決議

労働者・兵士代表ソヴェト全ロシア協議会が 1917 年 3 月 30 日(4 月 12 日）に採択した、メンシェヴィキ＝エス・エル的労働者・兵士代表ソヴェトの決議決をさす。それは、戦争にたいする態度についてのツェレテリの報告にかんする決議であるが、報告者の基本的な立場は、「革命は内敵に勝利した、外敵とたたかうことが革命の義務だ」というのであった。決議は自由と革命についてのきまり文句にかくれて、ブルジョア臨時政府の対外政策を支持するよう、つまり帝国主義戦争を継続するよう呼びかけた。

＊＊＊ 1915 年と 1916 年にツィンメルヴァルドとキンタールでひらかれた国際主義者の国際社会主義者会議をさす。

第 36 巻『労働者・兵士代表ソヴェト全ロシア会議に
参加したボリシュヴィキの集会での演説』P510～521
1917 年 4 月 4(17) 日
1924 年 11 月 7 日、新聞『プラウダ』第 255 号にはじめて発表
新聞のテキストによって印刷

ポイント

革命的祖国防衛主義の一般の信奉者の広範な層は、ブルジョアジーにだまされているのだから、彼らにたいしては、とくにくわしく、根気よく、忍耐づよく、その誤りを説明し、資本と帝国主義戦争との切ってもきれない結びつきを説明しなければならない。

大衆は事態を理論的(空論的)にではなく、実践的に、見ている。だから、このことを踏まえて、わかるように説明してやらなければならない。

ポイントは、どの階級が戦争をしているか、ということである。銀行と結びついた資本家階級には、帝国主義戦争以外のどんな戦争もすることはできない。資本を倒さないかぎり、戦争をおわらせることはできないということを、彼らにむかってとくに詳しく、根気よく、忍耐づよく、説明してやらなければならない。

われわれの誤りは、われわれが革命的祖国防衛主義を、その根底からあますところなく、暴露しなかった点にある。だから、誤りを認めなければならない。なすべきことは、説明することだ。　そして、大衆が、征服を欲しないと言明するなら、彼らを信じよう。しかし、グチコフとリヴォフが、征服を欲しないと語るなら、彼らは詐欺師である。そのことを説明しなければならない。労働者が、国土の防衛を欲すると語るなら、それは、抑圧された人間の本能が彼に語らせているのである。

人民は、なぜ権力をとらなかったか？　それは、プロレタリアートが十分に自覚しておらず、十分に組織されていないからである。いま、大衆の、政府にたいする軽信的、無自

覚的な態度があり、わがボリシェヴィキでさえ、政府への軽信的な態度を示している。これは、社会主義運動の破滅である。政府にたいして軽信的な態度をとっている同志諸君といっしょに行くことはできない。それよりはむしろ少数派にとどまっていたほうがよい。

臨時政府をいっさい支持しないこと。政府のいっさいの約束、まったくうそであることを説明すること。この政府、資本家の政府にむかって、帝国主義的であることをやめよという、幻想を植えつけるような、ゆるしえない『要求』を出すのではなくて、この政府を暴露すること。そうすれば、あらゆる被抑圧者がわれわれのほうへやってくるであろう。

ブルジョアジーの影響のもとに陥っていて、プロレタリアートにブルジョアジーの影響を伝達している、いっさいの小ブルジョア的な日和見主義的分子のブロックにくらべて、わが党が大多数の労働者代表ソヴェト内で少数派である。しかも、いまのところわずかな少数派である。だから、われわれの任務は、忍耐づよく、系統的に、根気よく、とくに大衆の実践的要求に適応したやり方で、臨時政府の戦術の誤りを説明することのほかにはありえない。

これまで、われわれボリシェヴィキは、最大限の革命性をひきだすことになれてきた。しかし、それだけではたりない。われわれが少数派であるあいだは、われわれは、大衆を欺瞞から抜けださせるために、批判の仕事をつづけなければならない。**われわれは、大衆がわれわれの約束を信じることをのぞまない。われわれは詐欺師ではない。われわれは、大衆が経験にもとづいて自分の誤りから抜けだすことをのぞんでいる。**

あらゆる革命をほろぼした唯一のものは、空文句であり、革命的人民にたいするへつらいである。革命的空文句に巻きこまれてしまわないこと、とくに、それがとりわけ流行している時機にそうならないこと、階級意識に満ちみちた目で現実を批判的に見る力を養うことをマルクス主義は教えている。

ラテン語でコンミューンについて語っても理解されない。しかし、具体的に、警察のかわりに、労働者・雇農代表ソヴェトが統治することを学びたまえと言えば、それは、理解されるであろう。統治の技能は、どんな書物からも読みとれるものではない。やってみ、失敗して、統治することを学ばなければならない。

農業綱領では、綱領の軸は移動した。重心を雇農代表ソヴェトにうつすことである。また、貧農代表ソヴェトをべつにつくらなければならない。わたしたちは、共同原則にもとづいて経営される模範経営を、大農場からつくりだすことが必要である。そしてその経営は、雇農代表ソヴェトがしなければならない。

銀行は、国民経済の命脈であり、焦点である。われわれは、銀行をを労働者代表ソヴェトの統制のもとに統合することを説いている。

われわれの直接の任務は、社会主義を『導入』することではなくて、社会的生産と生産物の分配にたいする労働者代表ソヴェトの統制にいますぐうつることにすぎない。

このことをやりとげることのできる、新しい党を建設することにつとめよう。そうすればすべての被抑圧者がわれわれのほうへやってくるであろう。